

聖書：使徒 15：36～41

説教題：激しい反目となり

日時：2014年3月9日

エルサレム会議を終えて、アンテオケの教会は平和な日々を送っていました（35節）。その後、パウロがバルナバに話しかけます。「先に主のことばを伝えたすべての町々の兄弟たちのところに、またたずねて行って、どうしているか見て来ようではありませんか。」第一次伝道旅行でパウロは大変な経験をしました。迫害に次ぐ迫害を受けました。ルステラでは石打ちにされて町の外に引きずり出される扱ひも受けました。Ⅱテモテ3章でパウロはこの時のことを振り返り、「何というひどい迫害に私は耐えて来たことでしょうか。」と言っています。その町々にもう一度行こう！と言うのです。なぜでしょう。それはそこにいる兄弟たちのことを心に掛けていたからです。パウロは福音を受け入れた信者たちのその後の確実な成長を心から願っていました。またここには特別な事情もありました。15章1節で見たユダヤ主義者たちはパウロが第一回伝道旅行で福音を伝えた町々にも出かけて行って、人々をかき乱しました。そこでパウロは彼らが正しい福音にとどまり続けるように急いで「ガラテヤ人への手紙」を書き送りました。果たしてあの手紙がどのように受け止められたかを知りたいということもあったと思います。そしてその後になされたエルサレム会議の成果を伝えることによって、一層彼らの祝福に仕えたいと願ったのでしょう。こうして第2回目となる世界伝道旅行が計画されたのです。

ところがでした。パウロとバルナバが話し合っている内に一致できない点が浮上して来ました。それはマルコを連れて行くかどうかという点でした。マルコは第一回伝道旅行でパウロとバルナバと一緒に出発しましたが、小アジアに渡った時に一行から離れてエルサレムに帰ったことが13章13節に記されていました。なぜマルコはそのような行動したのか。その理由は聖書にははっきり書いてありません。ホームシックにかかったからか。その頃からリーダーシップがバルナバからパウロに変わったことを快く思わなかったからか。彼は異邦人伝道にあまり積極的ではなかったのか。あるいは前途に予想される困難を思うあまりに腰砕けになったのか。しかしバルナバがもう一度マルコを連れて行こうと提案していること自体、以前の彼の行動は伝道者に全くふさわしくないと結論できるほどのものではなかったことを示しているでしょう。ところが一方のパウロからすれば、どのような言い訳があるにせよ、あのような振る舞いをするようであれば、とても今回の旅行に連れてはいけないと判断されたのです。そこで二人の間に激しい衝突が起こったのです。37～38節：「ところが、バルナバは、マルコとも呼ばれるヨハネもいっしょに連れて行くつもりであった。しかしパウロは、パンフリヤで一行から離れてしまい、仕事のために同行しなかったような者はいっしょに連れて行かないほうがよいと考えた。」この結果、この素晴らしい宣教師チームが分裂し、互いに別行動を取るようになったのです。

なぜマルコを連れて行くか否かで、これほどのことが生じてしまったのでしょうか。まずマルコを連れて行こうと言ったバルナバの考えから見て行きたいと思います。彼がそう言い出した理由としてすぐに考えられるのはバルナバにとってマルコはいとこだったということがあ

るかもしれません。身内の人をひいき目に見てしまうことは考えられないことではありません。またマルコは途中までとは言え、前回の伝道旅行の経験者です。今回もキプロス島から訪問することを考えれば、彼を連れて行くことには大きな意味があるでしょう。しかし最大の理由はマルコにもう一度立ち返るチャンスを与えようと考えたからではないでしょうか。どのように弁護しても、前回のマルコの振る舞いに足りない点があったことは否めません。そんな彼にもう一回チャレンジの機会を与えようとした。それはこの働きにつくだけのふさわしい資質が、彼の内にあることをバルナバは見ていたからでもあったでしょう。

さすが「慰めの子」バルナバです。彼はこのニックネームの通りの働きをする人でした。パウロが回心後、エルサレムで一人ポツンとしていた時も、彼を全面的に引き受け、弟子たちのところに連れて行ったのはバルナバでした。またアンテオケ教会を牧するためにタルソまでパウロを捜しに行き、表舞台へ引っ張って来たのもバルナバでした。彼はそのようにまだ十分には花開いてはいない人の良い点を見つけて、それを伸ばすことに仕える人でした。ここでもマルコに何とか世界伝道の働きに返り咲いて欲しいと願ったのでしょう。

一方のパウロはどう考えたのでしょうか。彼にとってマルコは脱落者でした。アンテオケを出発して、当然最後まで一緒に行くものばかり思っていたのに、ある日突然「帰ります」と彼は言い出した。旅はまだ始まったばかりです。小アジアに上陸してこれからという時なのに、いとも簡単に最初の決意を取り消してさっさとエルサレムに帰って行った。そんな彼はとても伝道旅行の経験者とは言えない。彼は仕事のために同行しなかったも同然である。もちろんパウロがそこまでマルコをチームに入れることに反対したのは、今回の伝道旅行の困難さを思っていることでしょう。そこは以前に大変な迫害に会ったところですから。今回も気を休める暇もない日程の中を進んで行かなければならないかもしれません。決死の覚悟をもって臨まなければなりません。ですからそんなメンバーの中には遊び半分で参加するような人には混じって欲しくないのです。本当に信頼できる深い絆で結ばれている人以外は連れて行きたくないのです。その観点から考えた時に、パウロは人情的な気持ちを振り払って、マルコに対しては「ノー」という厳しい判断を下さなければならなかったのです。それは今回の奉仕に対するパウロの真剣さの裏返しでもあったのです。

この二人の内、どっちが正しく、どっちが誤っていたのでしょうか。ある人はパウロの方が正しかったのではないかと言います。40 節にはパウロの方だけが兄弟たちから主の恵みに委ねられて出発したとあります。そして今後もパウロの働きぶりが聖書に記されます。しかしこのことをもってパウロが正しいとは言えないでしょう。著者ルカはただそちらを選んで書いただけですし、彼がそうしたのはその後ルカ自身、パウロの伝道旅行に同行するようになるからです。むしろ今回の伝道旅行は前回のコースに従ってまずキプロスに渡って行くべきだったとすれば、そこに行ったのはバルナバです。その点からすれば横道にずれたのはパウロの方だったとも言えるわけです。

果たしてルカは何と記しているでしょう。39～40 節：「そして激しい反目となり、その結果、互いに別行動をとることになって、バルナバはマルコを連れて、舟でキプロスに渡って行った。パウロはシラスを選び、兄弟たちから主の恵みにゆだねられて出発した。」ルカは「激しい反目となった」とだけ書いています。「反目」という言葉は互いに反発し合ったということだけ

を述べていて、どちらかが正しくどちらかが悪いというニュアンスは現わしていない言葉です。ルカは判決を下していないのです。またこれはそうすることが難しい出来事だったでしょう。ある意味で二人とも立派な宣教師たちであり、どちらも主のためにそれぞれのことを主張しました。ただその視点が違ったのです。パウロは神のための「仕事」がきちんとなされることを第一に考えました。神の働きの前進のためには最高の奉仕がささげられなければならない。やってみてできなかつたらできなかつたでいいという安易な考えは決してパウロの考えではありませんでした。一方、バルナバは「人」が活かされることに重点を置いていました。そのためには自分がマルコの尻拭いをするのも覚悟の上で彼を育てようと思い、先のことを主張しました。どちらも大切な視点と言えます。奉仕がきちんとなされることばかり強調すると、どうしても厳しくなってしまう、「人」が切られてしまいます。そして誰もその働きにふさわしい人が育たなくなってしまう。だからと言って、人を生かすことばかり考えると、今度は「神の働き」がおろそかにされてしまいます。暖かい感じはして良いのですが、いつの間にか甘くなり、神を端っこに追いやって人間中心の世界となってしまいます。そのバランスを取るのは難しいことです。この素晴らしいキリスト教会のリーダーたちの間でさえそうだったのです。

そしてこのように良い視点をそれぞれに持っていたとは言え、結果的に激しく反目し、喧嘩別れに終わってしまったということは、そこに彼らの誤っていた点、行き過ぎた点、責められるべき点があったということも意味するでしょう。興奮のあまり度を越したかもしれないこと、感情を現わし過ぎたかもしれないこと……。天国ではこんなことはないということを考えれば、やはり地上にあるがゆえの彼らの罪から来る良くない点が現れたと言っても言い過ぎではないでしょう。彼らもまた救い主を必要とする罪人だったのです。ルカはそのことを隠さずに書いているのです。こうしてバルナバはマルコを連れてキプロスへ、パウロはシラスを連れてシリア、キリキヤ地方へ出発します。

果たしてこの後、これらの働き人はどのように歩んだのでしょうか。これ以後、彼らが別れたきりで何の関わりも持たなかったなら、この出来事を知るすべて者はがっかりするだけでしょう。しかし素晴らしい導きがあったことを私たちは聖書から知ります。まずコロサイ書 4 章 10 節にマルコの名前が他の人と共に記され、パウロは「彼らは神の国のために働く私の同労者です」と言っています。またピレモン書 24 節にも、「私の同労者たちであるマルコ」と出て来ます。そしてパウロのⅡテモテ 4 章 11 節にこのように出て来ます。「マルコを伴っていっしょに来てください。彼は私の務めのために役に立つからです。」マルコはやがての日にパウロと再会したばかりか、パウロに大いに認められ、感謝される人へ成長していたのです！役に立たないと言われたも同然の彼だったのに、パウロは役に立つと言っています。この背後にはやはりバルナバの働きがあったのでしょうか。パウロはどんな思いでこれらの言葉を書いたことでしょうか。またバルナバについてパウロはⅠコリント人 9 章 6 節で、自分の無二の同労者として紹介しています。彼はバルナバと激しくぶつかってしまいましたが、その後でもバルナバを尊敬し、心から認めていました。ここにもただバルナバとけんか別れをしたままで、心を頑なにしていたのではないパウロの姿を見ます。そして今日の箇所ではパウロとバルナバは互いに別行動を取ることになりましたが、この結果、1 チーム 2 人だけだった世界宣教の働きが 2 チーム

ム4人へと倍増しました。主はこのように人間の悪さえも逆に用いて、さらに宣教の働きを導いてくださったのです。

ここから私たちは何を言うべきでしょう。神はこのように私たちの愚かな歩みからも祝福を取り出してくださるから、私たちは自分の歩みに少々無頓着であっても良いということでしょうか。もちろんそうではありません。私たちはここを根拠にして、クリスチャン同士のけんかや争い、あるいは教会分裂の言い訳をしてはならないのです。パウロとバルナバが激しく反目し合ったから宣教が進んだのではないのです。彼らがしたことは宣教の働きを妨げ、教会を危機的な状況に追い込みかねないことだったにもかかわらず、恵み深い主がただ奇しい御手をもってそれを良いことのために用いてくださっただけなのです。ですから彼らのなすべきことは自分たちのしたことを正当化することではなく、ただあわれみ深い神の前にへりくだって礼拝することです。このエピソードには私たちの罪は赦され得ること、私たちの失敗は回復され得ることが示されています。私たちが主の前にへりくだり、それぞれに悔い改め、主の奇しい御手に信頼するなら、主はそこから大いなることを導いてくださる。ローマ書8章28節：「すべてのことを働かせて益としてくださる」。私たちにもこの箇所のパウロとバルナバのようなことはないでしょうか。自分のこれまでの人生の汚点、大きな失敗、取り返しのつかないと思えるようなあのこと、このことがそれぞれにあるかもしれません。しかし私たちが自らを真摯に振り返り、悔い改め、主の前にへりくだって歩むなら、主はそれさえも益に変えて用いてくださるのです。私たちが犯した悪からも、良いことを取り出してくださるのです。その神を見上げて、恵みの御手に導かれる幸いな歩みへ進みたいと思います。